

日本における場面緘黙高リスク児スクリーニングのための 後方視的行動抑制アセスメント尺度 (RASBI-J) 原案の項目検討

酒井 貴庸*・奥村真衣子**・松下 浩之***・園山繁樹†

Takanobu SAKAI, Maiko OKUMURA, Hiroyuki MATSUSHITA and Shigeki SONOYAMA

I. 問題と目的

米国精神医学会 (American Psychiatric Association ; APA) による「精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders ; DSM-5)」では、場面緘黙 (Selective Mutism) は「他の状況 (家庭など) で話しているにもかかわらず、学校などの話すことが期待される社会的状況において、話すことができない」ことを主症状として不安症に分類される。また、その特徴として症状が 1 か月以上持続し、話すことができないことで学業上や職業上の成績、または対人的コミュニケーションに支障をきたすこと、それらは社会的状況で要求されている話しことばの知識、または話すことに関する楽しさが不足していることによるものではなく、また、コミュニケーション症や自閉スペクトラム症などでは説明できないことが挙げられている (APA, 2013)。

場面緘黙の発症年齢は通常、5 歳未満と考えられている (APA, 2013)。Viana, Beidel, and Rabian (2009) の過去 15 年間のレビューにおいては平均 2.7 歳から 4.1 歳の発症であることが報告されている。わが国でも、山村・内山・加藤・杉山 (2014) が過去 9 年間における 89 名の来院症例について報告しているが、発症年齢は 3 歳が 45 名 (51%)、5 歳が 35 名 (39%) であり、幼稚園や保育所等への入園を契機に発症するケースが多いことを示している。場面緘黙は原因が特定されておらず、さまざまな環境および遺伝的要因の相互作用から生じるという理解が支持されているが (Viana et al., 2009)、その発症機序については十分に解明されておらず、早期発見・早期支援のためのシステム構築が必要である。そのため、3 歳以前に将来の場面緘黙発症のリスクを把握できれば、事前的・予防的な対応を講じることができる可能性があり、場面緘黙のリスク回避が期待できる。

場面緘黙はこれまでに社交不安症との関連が示唆されており、Black and Uhde (1995) は場面緘黙児 30 例のうち 29 例が社交恐怖か回避性障害に該当し、Dummit, Klein, Tancer, Asche, Martin, and Fairbanks (1997) は 50 例のうちすべてで社交恐怖か回避性障害に該当したことを示している。また、Kristensen (2000) は場面緘黙 54 名のうち 74.1% が不安障害の診断基準に該当し、68.5% が発達障害 (コミュニケーション障害 50.0%, 発達性協調運動障害 17.0%, アスペルガー障害 7.4%, 軽度知的障害 7.7%, チック 1.9%) の基準に該当したことを示している。さらに、併存症を複数併せ持つケースも少なくなく、46.3% は不安障害と発達障害の両方の診断基

* 甲南女子大学人間科学部

** 信州大学学術研究院教育学系

*** 山梨大学教育学部障害児教育講座

† 島根県立大学人間文化学部

準に該当したことを示している。このように場面緘黙の事例の中には、社交不安を核としながらも神経発達上の何かしらの脆弱性を併せ持つ可能性がある。

また、場面緘黙の幼少期の特徴として、抑制的な気質が指摘される。例えば、場面緘黙の子どもをもつ親は、子どもが幼少期に極度の恥ずかしがりであったり、または引っ込み思案であったりしたことを報告する傾向がある (McHolm, Cunningham, & Vanier, 2005 ; Russel & Cohn, 2012)。場面緘黙は行動の緩慢さや内向的な気質と関連づけられてきているが、こうした行動抑制的側面は、発症の前兆を示唆するものと考えられる (Ford, Sladeczek, Carlson, & Kratochwill, 1998)。行動抑制 (behavioral inhibition ; BI) は、Kagan, Reznick, Clarke, Snidman, Garcia, and Coll (1984) により提唱された概念である。BI は、なじみのない、または新しい人、場所、状況、物に対する行動のおよび感情的な反応の比較的一貫したパターンとして表出されるが、行動抑制的な子どもは、新しい状況に対して、最初は抑制的で、注意深く、ゆっくり接近したり、引っ込んだりする、そして、なじみのない人に対しては、恥ずかしがり屋で、臆病で、口数が少ないといった特徴を示す。このような幼少時の BI は社交不安症の危険因子であることが以前より指摘されており、子どもの 15%が極度の BI を示し、そのほぼ半数が最終的に社交不安症を発症するとされる (Clauss & Blackford, 2012)。精神疾患の予防には、発達上の危険因子を早期に特定することが重要であり、社交不安症と関連の高い場面緘黙においても、BI との関連から早期発見・早期支援の方法を検討する必要がある。

場面緘黙の予測因子である BI は、社交不安症の予測因子でもあるため、その弁別には難しさがある。Gensthaler, Khalaf, Ligges, Kaess, Freitag, and Schwenck (2016) は、後方視点的幼児行動抑制尺度 (Retrospective Infant Behavioral Inhibition ; RIBI) を作成し、場面緘黙、社交恐怖、内在化障害、対照群の 4 群の 1~2 歳時の BI について、保護者による回顧的評価によって比較している。場面緘黙群と社交恐怖群は内在化障害群と対照群に比べて BI が高く、さらに場面緘黙群は社交恐怖群より全体得点と一部の項目でより重症度が高いことを示している。また、Milic, Carl, and Rapee (2020) は、3~7 歳の場面緘黙群、社交不安症群、対照群の社交不安や行動抑制を比較した。場面緘黙群と社交不安症群の子どもは対照群よりも不安が高く、さらに場面緘黙群の子どもは、社交不安症群および対照群よりもいくつかの抑制尺度で高いスコアであったことを示した。これらの結果からは場面緘黙と社交不安症の強い類似性は支持されるが、場面緘黙の子どもは特定の症状においてさらに大きな重症度を示す可能性があることを示唆している。

加えて、近年は新たな概念像として、自閉スペクトラム症との関連を支持する研究もある。Muris, Monait, Weijsters, and Ollendick (2021) は、3~6 歳の就学前児童の保護者を対象に、場面緘黙と社交不安、自閉的特徴、BI との関係性を調査している。その結果、場面緘黙と社交不安、自閉的特徴、BI との間に正の相関関係があることを示したが、回帰分析によって BI の寄与が特徴的であると結論付けている。また、BI と自閉的特徴における正の相関は、BI の主な特徴として、自閉スペクトラム症の多くに見られる「同一性へのこだわり」や「小さな変化に対する苦痛反応」といった典型的な臨床症状と類似していることも影響したと考えられるが、研究が少なく実態はよくわかっていない。

上記の研究より、場面緘黙に関連するさまざまな特徴が示唆されるが、場面緘黙を予測する指標として使用するためには、行動抑制的傾向のほかに、神経発達症の特徴を含んだより広い観点

から特徴をとらえ直す必要がある。そこで本研究では、行動抑制や気質に関する先行研究を参考に、場面緘黙のリスクを予測する尺度の項目群の検討を行い、保護者が子どもの入園前に回顧的に評価できる、場面緘黙のスクリーニング尺度開発のための基礎的知見を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者および調査実施期間

インターネットを介した調査を行っている業者（株式会社クロス・マーケティング）へ依頼し、3～12歳の子どもの養育者で、子どもが1～2歳頃の様子について回顧的に回答できる者約1,000名を抽出した。調査実施期間は2022年2月15日から2022年2月18日であった。

2. 調査指標

本研究では、以下の4点を調査指標として質問票を構成した。

(1) 属性

子どもの年齢および性別、保育所やこども園への在園の有無、養育者の続柄および年齢、母語などについて回答を求めた。

(2) 日本版後方視的行動抑制アセスメント尺度原案 (Original Version of the Retrospective Assessment Scale of Behavioral Inhibition for Japan: RASBI-J 原案)

RIBI (Gensthaler, Möhler, Resch, Paulus, Schwenck, Freitag, & Goth, 2013) を参考にし、子どもが1～2歳時点での行動抑制に関する質問26項目を作成した。項目の選定は、場面緘黙の研究に携さわる著者ら4名が協議して行った。その後、予備調査を行い、BIを測定する項目として適切と判断された項目で構成した。各項目について、「まったくなかった」(1点)から「いつもあった」(5点)の5件法で回答を得た。得点が高いほど行動抑制の程度が高いことを示す。

(3) 気質に関する質問項目

IBQ-R (中川・鋤柄, 2005; 中川・木村・鋤柄, 2009) および ECBQ (中川・木村・鋤柄・水野, 2011) のなかで、場面緘黙に関連することが報告されている気質(「discomfort (不快)」, 「perceptual sensitivity (知覚的敏感性)」, 「shyness (内気さ)」, 「fear (恐れ)」, 「sociability (社交性)」, 「high / low intensity pleasure (強い/弱い刺激への快)」) について合計42項目を使用した。各項目について、「まったくなかった」(1点)から「いつもあった」(5点)の5件法で回答を得た。得点が高いほど該当する気質の程度が高いことを示す。本指標は、基準関連妥当性の検討のために使用した。

(4) 場面緘黙質問票 (SMQ-R; かんもくネット, 2011)

SMQ (Bergman, Keller, Piacentini, & Bergman, 2008) を翻訳し作成された場面緘黙に関連する行動についての16項目からなる尺度であった。対象である子どもの現在の状態について、「全くない」(0)から「いつも」(3)の4件法で回答を得て、得点が低いほど場面緘黙に関連する行動が多く認められることを示す。本指標は、基準関連妥当性の検討のために使用した。

Table 1 各指標の記述統計量

各指標および項目	Min.	Max.	Mean	SD
<気質に関する項目>				
discomfort (不快)	3.00	15.00	5.52	2.20
perceptual sensitivity (知覚的敏感性)	10.00	50.00	23.37	7.46
shyness (内気さ)	2.00	10.00	5.01	1.46
fear (恐れ)	7.00	35.00	16.27	5.12
sociability (社交性)	4.00	20.00	13.17	4.99
high intensity pleasure (強い刺激への快)	4.00	20.00	12.86	3.85
low intensity pleasure (弱い刺激への快)	9.00	45.00	29.43	8.10
<RASBI-J原案の項目>				
新奇刺激への抵抗・回避	19.00	95.00	41.64	12.62
新奇刺激の好奇・接近	7.00	35.00	17.42	5.67
<場面緘黙質問票に関する項目>				
SMQ-R 幼稚園や学校	6.00	24.00	18.49	4.64
SMQ-R 家庭や家族	6.00	24.00	17.51	4.34
SMQ-R 社会的状況	4.00	16.00	9.98	3.33
SMQ-R合計	16.00	64.00	45.98	10.84

(n=1042, 男児: 518, 女児: 522, その他: 2)

3. 倫理的配慮

本研究は、すべての著者がそれぞれ所属する各大学の研究倫理委員会の承認を得て行われた。

4. データ分析

RASBI-J 原案に対して得られたデータについては、因子分析後に項目反応理論 (Item Response Theory ; IRT) を用い、各項目の適切さを検討するために、識別力、困難度および各項目群におけるテスト情報量を算出した。気質に関する質問項目および SMQ-R については、引用元の研究結果に従い各個人の気質を点数化し、RASBI-J 原案の各因子得点との相関係数を算出した。

III. 結果

1. 基本情報

日本国内に在住する 1042 名の養育者 (父親 503 名 (48.3%) , 母親 539 名 (51.7%)) から有効回答を得た。回答の対象となった子どもは、1042 名 (男児 518 名 (49.7%) , 女児 522 名 (50.1%) , その他 2 名 (0.2%)) であった。日本語を母語とする養育者は 1039 名 (99.7%) , 対象の子どもにおいては 1037 名 (99.5%) であった。各指標の記述統計量を Table1 に示した。すべての指標において天井および床効果は認められなかった。

2. RASBI-J 原案の項目分析

因子分析 (主因子法, プロマックス回転) の結果, RASBI-J 原案は, スクリープロットにおける固有値の減衰状況により第 1 因子 19 項目, 第 2 因子 7 項目の 2 因子構造が妥当であると判断された (Table 2)。項目の内容から判断し, 第 1 因子を「新奇刺激への抵抗・回避」, 第 2 因子を「新奇刺激への好奇・接近」とした。それぞれの因子の項目群における識別力は, 第 1 因子 0.900

Table 2 RASBI-J 原案の因子分析結果

		F1	F2
20	めったに会うことのない親戚や、大人しかいない友人の家族を訪ねた時、保護者にしがみついたり、後ろに隠れたりする	.808	-.212
19	めったに会うことのない親戚や、大人しかいない友人の家族を訪ねた時、後ろに引っ込んで目を合わせようとしない	.789	-.203
16	知らない大人が直接声をかけると、保護者にしがみついたり、後ろに隠れたりする	.783	-.183
15	初対面の大人が手を取ろうとすると、泣いたり顔を背けたりする	.771	-.139
13	知らない人がいると引っ込み思案になる（引きこもる、話さなくなる）	.765	-.271
12	新しい環境で、しがみついたり膝の上にとずっと座っていたがったりする	.743	-.088
11	新しい環境では、自由に動き始めるまでかなり長い時間落ち着かない様子である	.730	-.057
14	知らない大人とは最初から関わろうとしない（アイコンタクト、握手など）	.695	-.242
22	知らない子どもに会うときは、遊び始めるまでかなり長い時間がかかる	.660	-.281
3	普段の生活で、騒がしいところでは、まわりの騒音にいらだつ	.558	.144
26	他の人の前で表現する（例えば、歌う、踊る）のをためらう	.553	-.170
25	注目を浴びるのを嫌がる	.532	-.249
10	自宅で、新しいもの（例えば、家具や置物）に対してとても慎重に接近する	.505	.210
1	大きな音（掃除機など）がしていると落ち着かない	.495	.212
6	お風呂で、お湯を怖がる（体をこわばらせたり、逃げようとする）	.492	.188
5	保護者が急に抱っこしたり接近したりすると怖がる	.470	.242
2	普段の生活で、クーラーや暖房器具、冷蔵庫の運転音や始動音などの低い音に注意を向ける	.451	.259
4	保護者の外見の変化（髪の色、ひげ、眼鏡、帽子、アクセサリなど）に対して、泣いたり、嫌そうな反応をする	.449	.217
9	迷子にならないように、外では保護者のそばにすることが多い	.443	.141
7	散歩をしているとき、はじめて見る物に対して怖がらずに速やかに近づく	.288	.590
8	怖いもの知らずで、いつの間にかいなくなるほど素早く動く	.264	.597
23	注目を浴びるのを楽しむ	.141	.575
17	知らない人が家に来ると、すぐに興味津々で近づいていく	.140	.735
18	家に来た知らない大人と、一緒に遊んだり活動したりする	.131	.706
21	知らない子どもに会ったとき、自分から近づき、一緒に遊ぼうとする	.078	.705
24	喜んで他の人の前で表現する（例えば、歌う、踊る）	.074	.595
寄与率（%）		48.114	8.140
累積寄与率（%）		48.114	56.254

から 3.799, 第 2 因子 1.676 から 6.010 であった。また, 第 1 因子の「まったくない」と「ほとんどなかった」における困難度は -1.910 から 0.413, 「よくあった」と「いつもあった」における困難度は 1.877 から 2.627 であった。第 2 因子の「まったくない」と「ほとんどなかった」における困難度は -1.490 から -0.686, 「よくあった」と「いつもあった」における困難度は 1.877 から 2.627 であった (Table 3)。各因子のテスト情報曲線は Figure1 に示した。

3. 各指標間の相関分析

RASBI-J 原案の得点とその他の調査指標との相関係数を Table 4 に示した。

Table 3 RASBI-J 原案の各項目の困難度・識別力

item	difficulty 1	difficulty 2	difficulty 3	difficulty 4	discrimination
20	-0.541	0.405	1.170	1.820	3.799
19	-0.546	0.441	1.179	1.923	3.347
16	-0.705	0.218	1.022	1.676	3.490
15	-0.572	0.436	1.223	1.952	3.065
13	-0.703	0.156	0.880	1.709	2.912
12	-0.504	0.587	1.331	2.058	2.406
11	-0.498	0.727	1.609	2.355	2.190
14	-1.007	0.198	0.995	1.869	2.515
22	-1.140	0.236	1.121	2.129	2.049
3	-0.662	0.683	1.926	3.181	1.267
26	-1.508	0.030	1.363	2.472	1.556
25	-1.507	0.352	1.682	2.778	1.402
10	-0.325	1.573	2.910	4.035	1.174
1	-0.474	1.409	2.847	4.469	1.022
6	0.314	2.253	3.775	4.731	1.049
5	0.413	3.052	4.565	6.010	0.973
2	-0.062	2.548	4.243	5.974	0.900
4	-0.038	1.956	3.298	5.471	0.991
9	-1.910	-0.498	0.754	2.222	1.010
7	-1.015	0.203	1.282	2.498	1.843
8	-0.686	0.672	1.672	2.627	1.692
23	-1.463	-0.091	1.069	2.208	1.644
17	-0.743	0.398	1.181	1.877	3.111
18	-0.826	0.192	1.175	2.046	2.717
21	-1.143	0.033	1.033	1.960	2.353
24	-1.490	-0.289	0.873	2.090	1.563

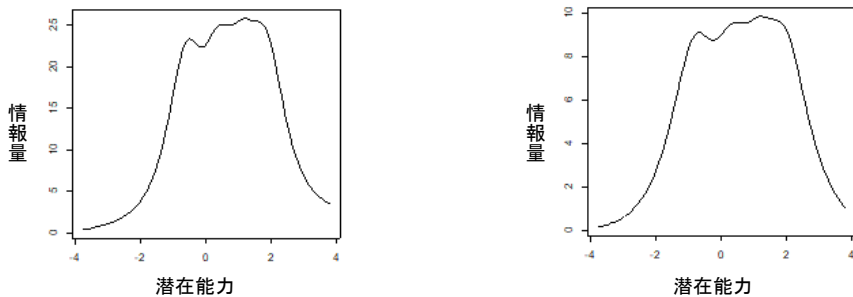


Figure 1 各因子のテスト情報曲線

左図は「新奇刺激への抵抗・回避因子」、右図は「新奇刺激への好奇・接近因子」をそれぞれ示す。

Table 4 各指標間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 discomfort (不快)	-	.627**	.366**	.603**	.139**	.214**	.178**	.553**	.367**	-.055	-.094*	-.008	-.063
2 perceptual sensitivity (知覚的敏感性)	.517**	-	.522**	.668**	.297**	.424**	.402**	.610**	.576**	.132**	.085	.063	.110*
3 shyness (内気さ)	.321**	.452**	-	.586**	.305**	.357**	.349**	.646**	.419**	.042	-.009	-.062	-.005
4 fear (恐れ)	.488**	.590**	.471**	-	.300**	.414**	.353**	.691**	.472**	.013	-.017	-.021	-.008
5 sociability (社交性)	-.001	.237**	.171**	.158**	-	.545**	.507**	.224**	.437**	.306**	.303**	.176**	.306**
6 high intensity pleasure (強い刺激への快)	.059	.357**	.235**	.227**	.493**	-	.707**	.329**	.561**	.250**	.280**	.187**	.276**
7 low intensity pleasure (弱い刺激への快)	.067	.357**	.268**	.242**	.490**	.644**	-	.297**	.506**	.261**	.287**	.179**	.281**
8 新奇刺激への抵抗・回避	.530**	.532**	.562**	.685**	.008	.113**	.152**	-	.198**	-.070	-.163**	-.187**	-.153**
9 新奇刺激の好奇・接近	.250**	.459**	.249**	.296**	.437**	.566**	.498**	.069	-	.181**	.269**	.233**	.257**
10 SMQ-R 幼稚園や学校	-.210**	-.035	-.045	-.115**	.286**	.107*	.187**	-.257**	.133**	-	.690**	.562**	.875**
11 SMQ-R 家庭や家族	-.186**	.037	-.070	-.105**	.343**	.221**	.259**	-.274**	.265**	.688**	-	.727**	.918**
12 SMQ-R 社会的状況	-.067	.083	-.095*	-.068	.265**	.157**	.223**	-.216**	.287**	.537**	.724**	-	.841**
13 SMQ-R合計	-.178**	.021	-.072	-.106*	.344**	.178**	.253**	-.284**	.248**	.870**	.912**	.817**	-

** : $p < .001$, * : $p < .05$ 上段 : 男児 ($n=518$) , 下段 : 女児 ($n=522$)

IV. 考察

本研究の目的は、行動抑制や気質に関する先行研究を参考に、場面緘黙のリスクを予測する尺度の項目群の検討を行い、保護者が子どもの入園前に回顧的に評価できる、場面緘黙のスクリーニング尺度開発のための基礎的知見を得ることであった。本調査で得られた児童の男女比は同等であり、ほぼ全ての児童の母語は日本語であったため、性別による偏りや母語の違いによる場面緘黙への影響は考慮する必要性は低かったと考えられる。

RASBI-J 原案への回答について因子分析を行った結果から、2 因子構造が妥当と判断し、第 1 因子を「新奇刺激への抵抗・回避」、第 2 因子を「新奇刺激への好奇・接近」とした。IRT を用いて検討したところ、各項目の困難度、識別力は概ね適切な値であったが、項目 5「保護者が急に抱っこしたり接近したりすると怖がる」、項目 2「普段の生活で、クーラーや暖房器具、冷蔵庫の運転音や指導音などの低い音に注意を向ける」、項目 4「保護者の外見の変化（髪の色、ひげ、眼鏡、帽子、アクセサリなど）に対して、泣いたり、嫌そうな反応をする」、その他 3 項目（項目 1、項目 6、項目 10）といった項目について「いつもあった」を選択した場合の困難度は 4.000 を超えていた。識別力 $a > 0.75$ 、困難度 $-2 \leq b \leq 2$ を基準（Ironson et al., 1989 ; Roznowski, 1989）で項目の選定をした場合には、困難度 4.000 を超える項目に対して「いつもあった」に当てはまる子どもは極めて稀である。これらの項目は、感覚過敏や変化に対する抵抗といった意味合いの項目とも考えられ、ASD との関連も疑われるため、除外項目の候補としても検討の余地があるであろう。

第 2 因子である「新奇刺激への好奇・接近」の内容を確認すると、第 1 因子と反対の意味合いの項目であり、反転項目と想定されていたが、分析の結果は別の因子となった。Table 4 の相関係数の結果においても、男女で第 2 因子とその他の指標との関連も異なることから、男児においては、RASBI-J 原案が 2 因子構造であることの意義について今後も検討する必要があるであろう。また、女兒の RASBI-J 原案の第 1 因子「新奇刺激への抵抗・回避」と気質（「sociability（社交性）」、「high intensity pleasure（強い刺激への快）」、「low intensity pleasure（弱い刺激への快）」）との関連が、男児に比べて弱い傾向が認められた。このように SMQ-R の合計および下位尺度と気質に関する因子との関連は男女によって異なる点が多いことが示唆されたことから、男女間における尺度得点の重みづけの修正や、場合によっては使用項目の構成を異なるものにするといった検討が必要と考えられる。さらに、RASBI-J 原案の第 1 および第 2 因子と気質との関連は、男女ともに有意である因子間の相関係数は全て正の値であるのに対して、RASBI-J 原案と SMQ-R の関連は、第 1 因子とは負、第 2 因子とは正の関連であることが男女共に示されている。先述の通り RASBI-J 原案の第 1 および第 2 因子の項目の内容は反対の意味合いがある項目で構成されているにも関わらず、両因子と正の関連がある気質の因子に対しては弁別することには使用できないと考えられる。一方で、第 1、第 2 因子と SMQ-R との得点間で正負別の関連が示されたことによって、場面緘黙に関連する気質よりも本研究で採用した RASBI-J 原案の第 1 因子の方が、場面緘黙を予測、弁別する因子として優れている可能性が示された。

項目作成の手順およびその他の指標との相関係数から RASBI-J 原案の内容的妥当性および基準関連妥当性は概ね認められたと判断できるが、先述の課題は残っている。そのため、今後は、男女間における項目選定、より高い精度で将来の場面緘黙傾向を予測する項目群についての検討

が必要である。また、場面緘黙の診断の有無についてや加齢に伴う状態像の変化についても検討することが望ましいと考える。

付 記

本研究は JSPS 科研費 20K20422 の助成を受けて行われた。本研究の一部は、障害科学学会第 17 回大会および日本特殊教育学会第 60 回大会においてポスター発表した。

文 献

- 1) American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (5th ed.)*. Arlington, Virginia. 高橋三郎・大野裕監訳 (2015) DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.
- 2) Bergman, R., Keller, M., Pacentini, J., & Bergman, A. (2008) The development and psychometric properties of the selective mutism questionnaire. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 37, 456-464.
- 3) Black, B., & Uhde, T. W. (1995) Psychiatric characteristics of children with selective mutism : A pilot study. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 34, 847-856.
- 4) Clauss, J. A. & Blackford, J. U. (2012) Behavioral inhibition and risk for developing social anxiety disorder: A meta-analytic study. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 51, 1066-1075.
- 5) Dummit, S. E. III, Klein, R. G., Tancer, N. K., Asche, B., Martin, J., & Fairbanks, J. A. (1997) Systematic assessment of 50 children with selective mutism. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 36, 653-660.
- 6) Ford, M. A., Sladeczek, I. E., Carlson, J., & Kratochwill, T. R. (1998) Selective mutism: Phenomenological characteristics. *School Psychology Quarterly*, 13, 192-227.
- 7) Gensthaler, A., Möhler, E., Resch, F., Paulus, F., Schwenck, C., Freitag, C.M., & Goth, K. (2013) Retrospective assessment of behavioral inhibition in infants and toddlers: Development of a parent report questionnaire. *Child Psychiatry and Human Development*, 44, 152-165.
- 8) Gensthaler, A., Khalaf, S., Ligges, M., Kaess, M., Freitag, C. M., & Schwenck, C. (2016) Selective mutism and temperament: The silence and behavior inhibition to the unfamiliar. *European Child and Adolescent Psychiatry*, 25, 1113-1120.
- 9) Ironson, G. H., Smith, P. C., Brannick, M. T., Gibson, W. M., & Paul, K. B. (1989) Construction of a job in general scale: A comparison of global, composite, and specific measures. *Journal of Applied Psychology*, 74, 193-200.
- 10) Kagan, J., Reznick, J. S., Clarke, C., Snidman, N., & Garcia-Coll, C. (1984) Behavioral inhibition to the unfamiliar. *Child Development*, 55, 2212-2225.

- 11) かんもくネット (2011) SMQ-R(場面緘黙質問票). https://www.kanmoku.org/_files/uggd/0251a2_0678ec9bf50048e691d3bf5bc7ab8878.pdf (2023年1月2日取得) .
- 12) Kristensen, H. (2000) Selective mutism and comorbidity with developmental disorder/delay, anxiety disorder, and elimination disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 39, 249- 256.
- 13) Mchholm, A.E., Cunningham, C.E., & Vanier, M.K. (2005) *Helping your child with selective mutism*. New Harbinger Publications, Oakland. 河井英子・吉原桂子訳 (2007) 場面緘黙児への支援—学校で話せない子を助けるために—. 田研出版.
- 14) Milic, M. I., Carl, T., & Rapee, R. M. (2020) Similarities and differences between young children with selective mutism and social anxiety disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 133, 103696. DOI: 10.1016/j.brat.2020.103696
- 15) Muris, P., Monait, N., Weijsters, L., & Ollendick, T. H. (2021) Symptoms of selective mutism in non-clinical 3-to 6-year-old children: Relations with social anxiety, autistic features, and behavioral inhibition. *Frontiers in Psychology*, 12:669907. DOI: 10.3389/fpsyg.2021.669907.
- 16) 中川敦子・木村由桂・鋤柄増根 (2009) 乳児の行動のチェックリスト (IBQ-R) 短縮版の作成. 人間文化研究 (名古屋市立大学大学院人間文化研究科) , 12, 15-25.
- 17) 中川敦子・木村由桂・鋤柄増根・水野里恵 (2011) 乳幼児の行動のチェックリスト (ECBQ) 短縮版の作成. 人間文化研究 (名古屋市立大学大学院人間文化研究科) , 16, 1-15.
- 18) 中川敦子・鋤柄増根 (2005) 乳児の行動の解釈における文化差は IBQ-R 日本版にどのように反映されるか. 教育心理学研究, 53, 491-503.
- 19) Roznowski, M. (1989). Examination of the measurement properties of the Job Descriptive Index with experimental items. *Journal of Applied Psychology*, 74, 805-814.
- 20) Russel, J., & Cohn, R. (2012) *Selective mutism*. Book on Demand Ltd., Edinburgh.
- 21) Viana, A. G., Beidel, D. C., & Rabian, B. (2009) Selective mutism: A review and integration of the last 15 years. *Clinical Psychology Review*, 29, 57-67.
- 22) 山村淳一・内山幹夫・加藤大典・杉山登志郎 (2014) 選択性緘黙の治療. *そだちの科学*, 22, 63-67.